

## 概要

虚辞 *it* には分布に制限があることはよく知られているが、Chomsky and Lasnik (1977) や Lasnik (1995)、Bošković (1997) は虚辞 *it* がそれと関連づけられる従属節の CP を文中に必要とすると明示的に述べている。さらに、McFadden (2004) は独立して主語として機能できる節が文中に存在する場合に限り虚辞 *it* を用いることができると主張し、より緻密な分析を行った。しかし、これまでの先行研究は結局のところ「虚辞 *it* が従属節の CP を文中に必要とする」と記述するに留まっており、なぜそのような関係性が結ばれ、分布の制限があるのかを理論的に説明することができていない。本発表では、生成文法に一般的に認められている「選択関係」、特に「範疇選択」を用いて虚辞 *it* と従属節の CP の間の関係性に関して理論的に説明を与える。さらに、従来 Case Filter の違反として分析されてきたような文に対して、本発表は Case Filter に依拠せず説明可能であることを示した上、理論的にもその方向性が望ましいと主張する。また、一見すると本発表の反例となるような事実は独立した条件で排除可能であることを述べ、本発表の妥当性を強める。

## 1. 導入

- (1) a. It is likely [<sub>CP</sub> that John is sick].  
 b. It would be unfortunate [<sub>CP</sub> for John to be sick].  
 c. It would be unfortunate [<sub>CP</sub> to be sick].

(McFadden (2004: 322))

- (2) a. \*It is likely [<sub>TP</sub> to be a nice fellow in the room].  
 b. \*It is [<sub>NP</sub> a man] in the garden.

(Lasnik (1995: 18))

(3) 虚辞 *it* を用いた文<sup>1</sup>

- a. 従属節の CP が存在する場合 (= (1)) → 文法的  
 b. 従属節の CP が存在しない場合 (= (2)) → 非文法的

## 2. 先行研究

- (4) 虚辞 *it* はそれに対応する CP associate を文中に必要とする。

(Chomsky and Lasnik (1977), Lasnik (1995), and Bošković (1997), among others)

- (5) a. (1) は CP associate が存在するため文法的。  
 b. (2) は CP associate が存在しないため非文法的。

- (6) McFadden (2004: 322) の一般化

“the expletive [*it* – N.M.] can only associate with elements which are themselves eligible to be subjects.”

<sup>1</sup> 厳密には虚辞 *it* と照応 (指示代名詞) *it* を分ける必要があるが、その区別は今後の研究に残す。詳細は Kondo (2015 and references cited therein) を参照。本発表は McFadden (2004) が“expletive”と呼ぶ *it* を分析する。

- (7) a. [<sub>CP</sub> That John is sick] is likely.  
 b. [<sub>CP</sub> For John to be sick] would be unfortunate.  
 c. [<sub>CP</sub> To be sick] would be unfortunate.

(McFadden (2004: 322))

- (8) a. \*<sub>[TP</sub> To be a nice fellow in the room] is likely.  
 b. <sub>[NP</sub> A man] is in the garden.
- (9) a. CP 節が主語として機能する → 虚辞 *it* の associate として適切 (= (1))  
 b. TP 節は主語として機能できない → 虚辞 *it* の associate として不適切 (= (2a))  
 c. NP は主語として機能できるが節ではない → 虚辞 *it* の associate として不適切 (= (2b))
- (10) 虚辞 *it* が D 主要部であり、それが従属節の CP と併合して DP を形成する。 (Abe (2018))
- (11) a. It seems that John is happy.  
 b. [<sub>CP</sub> [<sub>TP</sub> It [<sub>VP</sub> seem [<sub>DP</sub> D =  $\#$  [<sub>CP</sub> that John is happy]]]]] (以後、取り消し線は copy を示す)
- (12) 動詞 *seem* は DP を補部に選択することはない。 (e.g. Chomsky (1981))  
 ⇒ (11b) の構造表示には問題が残る。

### 3. 理論的想定: 自由併合と labeling algorithm

- (13) 併合は自由に行われる (= free merger). (Chomsky (2004 *et seq*))
- (14) 統語対象物 (Syntactic Object (SO)) には label が付与されなければならない。 (Chomsky (2013))
- (15) Label はインターフェースにおける解釈に必要な不可欠である。 (Chomsky (2013))
- (16) Labeling algorithm
- a.  $\{\alpha H, XP\}$  ( $\alpha=H$ )
- b.  $\{\alpha \{X X_{[F]}, \{WP\}\}, \{Y Y_{[uF]}, \{ZP\}\}\}$  ( $\alpha=<F, F>$ )
- c.  $\{XP, \{\alpha \cancel{XP}, YP\}\}$  ( $\alpha=Y$ )

### 4. 提案

- (17) 虚辞 *it* は対応する従属節の CP が現れる環境でのみ認可される。
- (18) 虚辞 *it* が CP と直接併合する。 (cf. Stroik (1990, 1991, 1996) and Iwakura (2002))<sup>2</sup>
- (19) 虚辞 *it* と CP の併合  
 ⇒ 「選択関係」における範疇選択 (c-selection) から動機付けられる。

#### (20) 【提案】

従属節の C は虚辞 *it* を範疇選択することができる。その結果、 $\{it, CP\}$  が形成され得る。

- (21) 生成文法における一般的想定  
 ⇒ ある要素 X は名詞句であれば、主要部によって選択されて派生に導入される。
- (22) a. 虚辞 *it* は名詞句であることから、主要部によって選択される。  
 b. 虚辞 *it* は意味選択 (s-selection) はされないが、範疇選択 (c-selection) はされる。

<sup>2</sup> Stroik (1990, 1991)、Iwakura (2002) は虚辞 *it* が C の EPP により CP 指定部に併合する分析を行なっている。Stroik (1996) も CP 指定部に虚辞 *it* が併合するとしたが、なぜその併合が行われるかは述べていない。

- (23) 虚辞 *it* の生起環境は従属節の CP が現れる環境に限定されるため、虚辞 *it* が従属節の CP の主要部である C によって範疇選択されると想定することは妥当。
- (24) 自由併合の枠組みでは、選択関係が統語部門内部で併合にある種の制限を加えられない。  
(Mizuguchi (2019) and Hayashi (2021a, b))
- (25) Conceptual-intentional (CI) interface で label が選択関係に関与する。 (Mizuguchi (2019))
- (26) 動詞が名詞句を選択する場合  
⇒動詞は D (もしくは N) の label を持つ補部を必要とする。
- (27) SO が適切な label を持つ場合にのみ選択関係が満たされる。
- (28) 選択関係が label に基づいて解釈される (see also Hayashi (2021a, b)).
- (29) SO が移動した場合でも選択関係は捉えられるはずである。  
⇒copy の持つ label が選択関係に関与可能だと想定できる (see also Hayashi (2021a, b)).
- (30) 【虚辞 *it* の範疇選択に関して】  
CI interface において虚辞 *it* の copy を含む  $\{it, CP\}$  の集合が存在する時、従属節の C は虚辞 *it* を適切に範疇選択することができる。

## 5. 分析

### 5.1 CP の必要性

- (31) a. It is likely [CP that John is sick].  
b. It would be unfortunate [CP for John to be sick].  
c. It would be unfortunate [CP to be sick].  
(McFadden (2004: 322))
- (32) a. \*It is likely [TP to be a nice fellow in the room].  
b. \*It is [NP a man] in the garden. (Lasnik (1995: 18))
- (33) 虚辞 *it* は従属節の C によって範疇選択される (=20)).  
⇒従属節の C が現れない環境では虚辞 *it* が存在することができない。
- (34) a. 従属節の C が存在する場合は選択関係が満たせるため文法的 (=31)).  
b. 従属節の C が存在しない場合は選択関係が満たせないため非文法的 ((=32)).

### 5.2 派生

- (35) 動詞 *seem* は非対格動詞であるため R と v\* は外的対併合される。  
(Epstein, Kitahara, and Seely (EKS) (2016))
- (36) a. It seems that John is happy.  
b.  $\{\beta \text{ that } \{\alpha \text{ John is happy}\}\}$  ( $\alpha = \langle \text{phi}, \text{phi} \rangle$ )  
c.  $\{\gamma \text{ It } \{\beta \text{ that } \{\langle \text{phi}, \text{phi} \rangle \text{ John is happy}\}\}\}$   
d.  $\{\eta \text{ C } \{\zeta \text{ It } \{\epsilon \text{ T } \{\delta \text{ seems } \{\gamma \text{ It } \{\beta \text{ that } \{\langle \text{phi}, \text{phi} \rangle \text{ John is happy}\}\}\}\}\}\}$   
( $\beta = \gamma = \text{C}$ ,  $\delta = \langle \text{R}, \text{v}^* \rangle$ ,  $\epsilon = \text{T}$ ,  $\zeta = \langle \text{phi}, \text{phi} \rangle$ ,  $\eta = \text{C}$ )
- (37) 虚辞 *it* の主節の TP 指定部への移動は labeling algorithm (=16c)) から導出される。  
⇒ $\{\gamma \text{ It (=DP), CP}\}$  のままでは  $\{\text{XP, YP}\}$  であり label を付与することができない。
- (38) 虚辞 *it* の copy が  $\{it, CP\}$  に含まれるため範疇選択の関係性は満たされる。

- (39) 動詞 *seem* の補部の label は C となり、動詞と補部間でも適切な範疇選択の関係性が結ばれる。
- (40) もう一つの派生の可能性  
⇒原理的には (36c) の後、*that* 節を主語位置へ移動させることができる。
- (41) (40) で示した可能性は棄却される。  
\*That John is happy seems it.
- (42) (41) の派生
- {that {John is happy}}
  - {It {that {John is happy}}}
  - {{that {John is happy} {seems { $\gamma$  it {~~that {John is happy}~~}}}}<sup>3</sup>
- (43) (42) における問題<sup>4</sup>
- $\gamma$  の label が D であることから、動詞 *seem* は D を範疇選択することになる。
  - 動詞 *seem* が D を範疇選択することはない。 (e.g. Chomsky (1981))

## 6. 帰結

### 6.1 特異な文

- (44) John resented (it) that Georgina was leaving. (Authier (1991: 730))
- (45) a. I just knew that Mary would fire John today.  
b. I just knew it that Mary would fire John today. (Stroik (1996: 239))
- (46) 虚辞 *it* と *that* が表層上隣接できる場合もある。  
(Stroik (1990, 1991), Authier (1991), Bošković (1995), Postal and Pullum (1998), and Nomura (2003), among others)
- (47) (45a) の派生  
 $\{C C \{<phi, phi> I \{<R, v^*> just \{<R, v^*> I \{<R, v^*> <R, v^*> \{C that \{<phi, phi> Mary would fire John today\}}\}}\}}\}$

<sup>3</sup> Labeling algorithm の枠組みにおける *that* 節主語の派生に関しては Mizuguchi (2016)などを参照。

<sup>4</sup> 虚辞 *it* を含む文においては、*that* 節を話題化することもできない。

- (i) a. \*[That he had solved the problem]<sub>i</sub> we didn't really find it very surprising *t<sub>i</sub>*.  
b. We didn't really find it very surprising that he had solved the problem. (Higgins (1973: 159))  
c. \*[That Mary left]<sub>i</sub> John knows it *t<sub>i</sub>*.  
d. John knows it that Mary left. (Bošković (1995: 34))

(ia) や (ic) においても label や選択関係の問題は無く、派生は収束すると考えられる。しかしながら、それらの文は非文法的である。Iwakura (1991) は虚辞 *it* と *that* 節が同一指標を持ち、前者が R 表現であると考えたと、虚辞 *it* が話題化された *that* 節に束縛されて非文法的となっていると分析している。しかし、考慮すべき事項が多く残っているため、本発表はこの事実に関する議論を後の研究に残す。

- (48) (45b) の派生
- {it {that {<phi, phi> Mary would fire John today}}}
  - {just {I {v\* {R {it {that {<phi, phi> Mary would fire John today}}}}}}
  - {just {I {v\* {<phi, phi> it {R R {C # {C that {<phi, phi> Mary would fire John today}}}}}}}}
  - {C C {<phi, phi> I {T T {R-v\* just {R-v\* I {R-v\* R-v\* {<phi, phi> it {R R {C # {C that {<phi, phi> Mary would fire John today}}}}}}}}}}
- (49) 派生が収束する限り自由な併合が許される。 (Chomsky (2015))
- (50) a. 虚辞 *it* の copy が {it, CP} に含まれるため、従属節の C の間の選択関係は満たされる。  
 b. categorizer である v\* が存在するため動詞とみなされる Root の補部は C の label を有する。従って、動詞と補部間での選択関係も満たされる。

## 6.2 Case Filter に依拠しない説明

- (51) 【Case Filter 違反と考えられてきた文 1】  
 \*It was invited a man to the party.
- (52) 従来の説明  
 ⇒動詞 *invited* が受動分詞であることから、*a man* に抽象格を与える要素が存在せず、*a man* が Case Filter (=53)) に違反する。
- (53) Case Filter  
 \*NP if NP has phonetic content and has no case. (Chomsky (1981: 49))
- (54) Case Filter の妥当性に対して懐疑的な先行研究が存在する。  
 (Marantz (1991), McFadden (2004), Carstens (2011), Diercks (2012), Sigurðsson (2012), van der Wal (2015), Sheehan and van der Wal (2018), and Moritake (2022a, b, to appear), among others)
- (55) Mad Magazine Sentences (MMs)  
 What! Her/\*She call me up?! Never! (Akmajian (1984: 3))
- (56) MMs の主語はデフォルト格として対格を伴って発音される。  
 (Lambrecht (1990) and Schütze (1997, 2001))
- (57) デフォルト格は抽象格ではなく形態格であり、Case Filter を満たすために与えられる格ではない。  
 (Schütze (2001), McFadden (2007), and Moritake (2022a, b, to appear), among others)
- (58) (55) における主語 *Her* は Case Filter に違反するが、文自体は容認可能。
- (59) a. Case Filter を維持することは理論上望ましくない。  
 b. Case Filter に依拠して (51) の非文法性を説明することは避けるべきである。
- (60) 虚辞 *it* は従属節の CP が存在する環境でのみ生起可能 (=20))。
- (61) (51) は従属節の CP が存在しないため、虚辞 *it* をそもそも用いることが不可能。  
 ⇒Case Filter を採用せずに説明可能。
- (62) 【Case Filter 違反と考えられてきた文 2】  
 \*Who does it seem [TP to be a nice fellow]? (Chomsky (1980: 28))
- (63) (62) における従属節は TP である。故に、虚辞 *it* が生起できない。  
 ⇒Case Filter を採用せずに説明可能。
- (64) 本発表の提案 (=20)) は余剰な仮説を排除できるため理論的にも望ましい。

### 6.3 優位性効果

(65) \*It was told John [<sub>CP</sub> that Mary left]. (Richards (2008: 183))

(66) 従属節の CP が存在するにも関わらず、(65) は非文法的。

(67) 間接目的語が直接目的語よりも構造上高い位置に生起する。 (e.g. Larson (1988))

(68) ... T ... John ... {It, CP}   {{It {T {was told John {It, CP}}}}}

(69) a. (65) の非文法性は優位性効果から引き出される可能性。

b. 自由併合において優位性効果をどのように説明するかは今後の研究に残す。<sup>5</sup>

### 6.4 Comp-Trace Effect

(70) \*Who would it be unfortunate [<sub>CP</sub> for to be sick]?

(71) *for* で導かれる従属節の CP が含まれるにも関わらず、(70) は非文法的である。

(72) It would be unfortunate [<sub>CP</sub> for John to be sick]. (McFadden (2004: 322))

(73) a. *Who* が従属節の TP 指定部から移動する。

b. *Who* の trace (copy) が *for* に後続する位置に存在する。

(74) *Who* の移動は Comp-Trace Effect (Chomsky and Lasnik (1977), Pesetsky and Torrego (2001), and McFadden and Sundaresan (2018), among others) に違反する。

(75) [<sub>CP</sub> Who would it be unfortunate [<sub>CP</sub> ~~Who~~ [<sub>C'</sub> for [<sub>TP</sub> Who to be sick]]]]

## 7. まとめ

### 参考文献

- Abe, Jun (2018) "How to Probe Expletives," *Studia Linguistica* 72, 76-112. / Akmajian, Adrian (1984) "Sentence Types and the Form-Function Fit," *Natural Language and Linguistic Theory* 2, 1-23. / Authier, J.-Marc (1991) "V-Governed Expletives, Case Theory, and the Projection Principle," *Linguistic Inquiry* 22, 721-740. / Bošković, Željko (1995) "Case Properties of Clauses and the Greed Principle," *Studia Linguistica* 49, 32-53. / Bošković, Željko (1997) *The Syntax of Nonfinite Complementation: An Economy Approach*, MIT Press, Cambridge, MA. / Carstens, Vicki (2011) "Hyperactivity and Hyperagreement in Bantu," *Lingua* 121, 721-741. / Chomsky, Noam (1980) "On Binding," *Linguistic Inquiry* 11, 1-46. / Chomsky, Noam (1981) *Lectures on Government and Binding*, Foris, Dordrecht. / Chomsky, Noam (2004) "Beyond Explanatory Adequacy," *Structures and Beyond: The Cartography of Syntactic Structures* 3, ed. by Adriana Belletti, 104-131, Oxford University Press, Oxford. / Chomsky, Noam (2013) "Problems of Projection," *Lingua* 130, 33-49. / Chomsky, Noam (2015) "Problems of Projection: Extensions," *Structures, Strategies and Beyond: Studies in Honour of Adriana Belletti*, ed. by Elisa Di Domenico, Cornelia Hamann, and Simona Matteini, 3-16, John Benjamins, Amsterdam. / Chomsky, Noam and Howard Lasnik (1977) "Filters and Control," *Linguistic Inquiry* 8, 425-504. / Diercks, Michael (2012) "Parameterizing Case: Evidence from Bantu," *Syntax* 15, 253-286. / Epstein, Samuel D.,

<sup>5</sup> 自由併合の枠組みにおける優位性効果に対する他の説明は Mizuguchi (2014a, b) を参照。自由併合の枠組みにおける移動の一般的な制約に関しては Sakumoto (to appear) 参照。

**Hisatsugu Kitahara, and T. Daniel Seely (2016)** “Phase Cancellation by External Pair-Merge of Heads,” *The Linguistic Review* 33, 87-102. / **Hayashi, Norimasa (2021a)** “Selection in Head-Internal Relative Clauses in Japanese: A Labeling Solution,” *The Proceedings of WAFL* 15, 37-44. / **Hayashi, Norimasa (2021b)** *Labels at the Interfaces: On the Notions and the Consequences of Merge and Contain*, Doctoral dissertation, Kyushu University. / **Higgins, Francis R. (1973)** “On J. Emonds’s Analysis of Extraposition,” *Syntax and Semantics* 2, ed. by John P. Kimball, 149-195, Seminar Press, New York. / **Iwakura, Kunihiro (1991)** “Expletive *It* and CP-Trace,” *Linguistics Analysis* 21, 97-115. / **Iwakura, Kunihiro (2002)** “A Minimalist Approach to Expletive Constructions in English,” *English Linguistics* 19, 186-210. / **Kondo, Ryoichi (2015)** “Two Types of Extraposition Construction in English,” *English Linguistics* 32, 346-356. / **Lambrecht, Knud (1990)** “*What, Me Worry?* – Mad Magazine Sentences Revisited,” *Proceedings of the 16th Annual Meeting of the Berkley Linguistics Society*, 215-228, Berkley Linguistic Society, Berkley, CA. / **Larson, Richard K. (1988)** “On the Double Object Construction,” *Linguistic Inquiry* 19, 335-391. / **Lasnik, Howard (1995)** “Last Resort,” *Minimalism and Linguistic Theory*, ed. by Shosuke Haraguchi and Michio Funaki, 1-32, Hituzi Syobo, Tokyo. / **Marantz, Alec (1991)** “Case and Licensing,” *ESCOL* 91, 234-253. / **McFadden, Thomas (2004)** *The Position of Morphological Case in the Derivation: A Study of the Syntax-Morphology Interface*, Doctoral dissertation, University of Pennsylvania. / **McFadden, Thomas (2007)** “Default Case and the Status of Compound Categories in Distributed Morphology,” *Proceedings of the 30th Annual Penn Linguistic Colloquium*, 225-238. / **McFadden, Thomas and Sandhya Sundaresan (2018)** “What the EPP and Comp-Trace Effects Have in Common: Constraining Silent Elements at the Edge,” *Glossa* 43, 1-34. / **Mizuguchi, Manabu (2014a)** “Free Merge and Superiority Effects on *Wh*-Movement,” *LSO Working Papers in Linguistics* 11, 16-30. / **Mizuguchi, Manabu (2014b)** “Superiority Effects in Minimalism: A Case Study of A-Movement,” *English Linguistics* 31, 563-582. / **Mizuguchi, Manabu (2016)** “De-Activation of  $\phi$  Through Pair-Merge,” *English Linguistics* 33, 108-118. / **Mizuguchi, Manabu (2019)** “Ambiguous Labeling and Full Interpretation,” *Studia Linguistica* 73, 563-603. / **Moritake, Nozomi (2022a)** “Default Case and Chain Interpretation,” Paper presented at the English Linguistic Society of Japan 15th Spring Forum, May 14th, Online Conference. / **Moritake, Nozomi (2022b)** “On Case-marking in *There*-Constructions: A Default case Approach,” *Kyushu University English Review*, 64, 63-84. / **Moritake, Nozomi (to appear)** “On the Derivation of *There*-Constructions: A {*There*, Associate} Analysis,” *Studies in English Literature: Regional Branches Combined Issue* 15. / **Nomura, Masashi (2003)** “Expletives Move!,” *WCCFL* 15, 207-220. / **Pesetsky, David and Esther Torrego (2001)** “T-to-C Movement: Causes and Consequences,” *Ken Hale: A Life in Language*, ed. by Michael Kenstowicz, 355-426, MIT Press, Cambridge, MA. / **Postal, Paul M. and Geoffrey K. Pullum (1988)** “Expletive Noun Phrases in Subcategorized Positions,” *Linguistic Inquiry* 19, 635-670. / **Richards, Marc D. (2008)** “Quirky Expletives,” *Agreement Restrictions*, ed. by Roberta D’Alessandro, Susann Fischer, and Gunner Hrafn Hrafnbjargarson, 181-214, De Gruyter, Mouton. / **Sakutmoto, Yuya (2021)** “How to Restrict Movement under Free Merge,” *English Linguistics* 39. / **Schütze, Carson (1997)** *Infl in Child and Adult Language: Agreement, Case, and Licensing*, Doctoral dissertation, MIT. / **Schütze, Carson (2001)** “On the Nature of Default Case,” *Syntax* 4, 205-238. / **Sheehan, Michelle and Jennke van der Wal (2018)** “Nominal Licensing in Caseless Languages,” *Journal of Linguistics* 54, 1-63. / **Sigurðsson, H. Ármann (2012)** “Minimalist C/case,” *Linguistic Inquiry* 43, 191-227. / **Stroik, Thomas (1990)** “Expletive NPs in Object-Position,” *Canadian Journal of Linguistics* 35, 13-27. / **Stroik, Thomas (1991)** “Expletives Revisited,” *Linguistics Analysis* 21, 23-33. / **Stroik, Thomas (1996)** “Extraposition and Expletive-Movement: A Minimalist Account,” *Lingua* 99, 237-251. / **van der Wal, Jenneke (2015)** “Evidence for Abstract Case in Bantu,” *Lingua* 165, 109-132.